

学 部 長 挨 拶

司会(新國)：狩野陽社会情報学部長と前社会情報学部長で社会・意識調査データベース構築プロジェクトを創立されました田中一北大名誉教授からご挨拶を頂戴致します。

狩野陽学部長：お早うございます。朝早く、遠方からお忙しいなかをご参集頂きありがとうございます。今回は第6回のワークショップで、東大社研の日本社会研究情報センターのご協力で、多数ご参加を頂き有り難うございます。

もう3、40年も前のことになりますが、私も社会学会大会に潜り込んだことがありました。お招きを受けた用事が済みましたので、ある分科会に顔を出しました。そこでは、今は忘れてしまいましたけれど、研究報告が行われており、そのデータとして用いた面接調査対象の学歴が異常に高いということが、私もちょっと不思議に思いましたし、他の方にも疑義があったと見えまして、それが質問になって出ました。これは中央線沿線の普通の小都市で、いわば東京都内で、その時その時刻に異常に学歴が高いことに質問が出て、サンプルの取り方に問題があるのではないかと論議になりました。それに応じて、その部屋にいらっしゃった社会学者の中から、何人も、十数人になったかと思うのですが、同一地区で、同一の時間帯に自分が調査をしたときにはこういう学歴水準であったということをコメントされた方がいらっしゃったわけです。そして、ウィークデイのその時間帯では、高学歴の人々が、特に街頭でサンプルを取った場合においてはこのくらいたくさんになっていて、このデータがまったく本日発表されたデータと同じであるという趣旨でありました。それを聴きましたときに、私はある種の感動を覚えました。私も、いわば門前の小僧式に、尾高邦雄先生だとか、たくさんの方の

話は聞いておりました。しかしそこでの実証性というのは、いわば一人ひとりががんばって、ある種の行儀作法のような形で調査をするということであり、またその当時の社会研究者に通用している、学説の中で、何やらその分科会における皆さんのデータの出し方というのには、ある将来を感じさせました。材料を共有できる。何か後戻りをしない証拠を、つまり、調べるということの一種の利得を共有する。それを非常に力強く感じました。また社会学は新たな展望というか将来を持つでしょう。

本学部でも発足の当初から、このデータベースの構築については、プロジェクトとしての活動の中心に据えてまいりました。その創設者である田中一先生は既に核物理学の領域で、データベースの構築のお仕事を当然世界的な拡がり続けてこられましたので、それがこの学部のプロジェクトの中心になることはごく自然な成り行きで、しかもその条件があったかと思えます。今度いろいろな形のデータベースも含めて、より社会学が共同の蓄積の共同の利用可能な、後戻りをしない、いわば進歩への足場の工夫が報告され、論議されることになります。これは大変幸いで、ただそのためにこれまでの到達とこれから解決しなければならない手続きの見通しがあるかと思えます。私は、紹介する役目でございますので、ここで田中先生から一言挨拶を頂きます。

田中一前学部長：田中です。今、狩野学部長がおっしゃったところでございますが、ちょうど1989年から、もし学部がめでたく創設されましたら、データベース作成の事業を始めることにしてはと考えて、多くの方々と接触し、どのような形で進めればいいのかというようなことを検討し始めたわけございま

す。ですから、ちょうど今年で10年目ということになるかと思えます。それ以後時々申し上げたことを一言だけここでみなさんに聞いて頂けるかと思えます。ご存知の方も多いかと思えますが、25年前に、その頃の情報関係の特定研究が始まりまして、私はそのお世話を致しました。その時にやはりデータベースの仕事が出てまいりましたけれども、当時データベースの作成作業は決して一流の仕事ではないという印象が大変強くございました。それで、私その時申し上げました。考えてみると、数百万年前から人類が次第次第に進化を遂げて現在までできておりますが、その間の知的発展を支えてきたものは、よく考えてみるとデータベースの高次化という形でとらえることができるのではないのでしょうか。今までの経験を頭脳に蓄積して、それをその次にどのように生かすかという、毎日毎日の生活に直接必要なことが絶えず私達の前に現れまして、そして、使う情報を次第に高次化

し、これを高次に利用するという、そういう必要性、そういう過程を通じて私達の知的発展が次第に展開されてきたように思っています。従いまして、データベースというのは本来は第一級の仕事である、第一級の仕事でないように思われるのは、データベースの作成という仕事の責任ではなくて、これを見る、皆さん方の目がまだそこに至っていないということによるのではないか、そういうことを申し上げました。その頃国際会議に行きますと、データベースも小さなセクションでした。データベースの作成という仕事は長く続く、一年二年で思いついてやりだして終わるといふのではなしに、長く継続するというのが大事な仕事であるように考えております。現在、さらに新しい形での仕事が全体として進んできているというのは大変嬉しいことであるという風に思っています。一言申し上げまして挨拶に代えたいと思います。